福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」

体験中心の発表会や研修で、新たな学びの裾野を広げる

福岡県は、2015年度に独立行政法人教員研修センター（現：教職員支援機構）より「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」の推進地域の委嘱を受け、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の研究を進めている。「志は高く、ハードルは低く」を合いことばに、県立高校7校・県立中等教育学校1校の実践内容を全県に広げることが目的だ。事業を主導する福岡県教育委員会と福岡県教育センターに実践内容とその成果を聞くとともに、2017年12月に行われた実践発表会の模様をリポートする。

事業概要

今後の教育の方向性を見据え、全県で授業改善を図る

独立行政法人教員研修センター（現教職員支援機構）が行う「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」は、子どもの主体的・協働的な学びや、その実現のための指導法などを充実させるとともに、教師の指導力向上を図る研修プログラムの構築を目指す事業だ。期間は2015年度から3年間で、現在、11の自治体が研究委嘱を受けている。

その1つである福岡県は、県立高校7校と県立中等教育学校1校が、福岡県教育センター（以下、教育センター）や大学と連携しながら研究を進めている（**図1**）。研究委嘱により同機構に派遣されていた福岡県教育庁教育振興部高校教育課の鬼塚（おにつか）晋吾指導主事は、同プロジェクトにエントリーした理由を次のように語る。

「当時はアクティブ・ラーニング（以下、AL）という言葉が出始めたばかりで、私たち指導主事もそれがどういった学びなのか深く理解していませんでした。しかし、今後そうした方向に教育が進むのであれば、今から着手すべきであり、その研究を機に、各校の授業改善を活性化させたいと考えました」

研究開発校は、学科の種類や卒業後の進路、地域のバランスを見ながら決定。各校が連携する大学は、それぞれの課題や研究内容に応じて検討した。例えば、ICTの活用をテーマにした高校には情報技術系の大学教員を、生徒指導が課題だった高校には教育心理学の大学教員を、ビジネス系学科がある高校には経営学の大学教員を連携先として打診した。

「授業改善というと教育学部の研究者が連携先に挙がりやすいですが、生徒に身につけさせたい資質・能力を育むという点を最優先に考え、連

福岡県教育庁 教育振興部 高校教育課 指導主事
鬼塚晋吾 おにつか・しんご
（独）教職員支援機構派遣を経て、2017年度から現職。

福岡県教育センター 教育指導部 教科教育班 主任指導主事
瓜生純子 うりう・じゅんこ
福岡県立高校主幹教諭を経て、2015年度から現職。

福岡県教育センター 教育経営部 教育経営班 主任指導主事（総括）
髙野朝幸 たかの・ともゆき
福岡県立高校教頭を経て、2017年度から現職。

＊プロフィールは2018年3月時点のものです

写真１　２月に行われたチーム会議では、授業改善の到達度を測るルーブリックの作成に向け、３つの班に分かれて話し合った。ＫＪ法などを活用して評価の要素を整理し、まとめた内容を班ごとに発表した。

特命プロジェクトチームのメンバー

福岡県教育センターでは、事業内容によって、部班を超えたチームを結成し、事業を進めている。メンバーの担当教科や職務が異なることが、チームに多様な気づきをもたらし、現場支援の充実に結びついている。

携先を探しました」（鬼塚指導主事）

推進体制

部班を超えたメンバーの知識と経験を生かして支援

プロジェクトの企画運営は福岡県教育委員会が担当し、現場への支援は教育センターが立ち上げた特命プロジェクトチームが行う。チームのメンバーは12～14人（年度により変動）で、部や班を超えて任命された指導主事で構成されている。教育センター教育指導部の瓜生純子主任指導主事は、部班を超えたメンバーでチームを組むことの強みを次のように語る。

「メンバーは、各自が担当する教科や研修等における通常業務を行いつつ、本プロジェクトも推進します。現場の悩みや初任者が抱く疑問など、通常業務で吸い上げた様々な課題をチーム内で共有し、それを踏まえて実行計画を立てることで、効率的かつ効果的に学校を支援できました」

また、メンバーに特別支援学校や中学校を担当する指導主事がいたことで、チーム全体の視野が広がった。例えば、特別支援教育の観点で考え、ユニバーサル・デザインの視点で授業改善を行った学校もあるという。

さらに、週１回のチーム会議を主体的・対話的で協働的な場としたことも特徴的だ（**写真１**）。例えば、各自が関心を持った外部研修に参加し、そこで得た成果をホワイトボードや付箋を使ったグループワークで共有するといったことを行っている。

図１　福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」研究開発校

研究開発校	2017 年度の研究開発テーマ	連携大学
福岡県立北筑高校	論理的に説明する力を育む授業改善の研究	福岡教育大学
福岡県立折尾高校	評価法を基軸とした新しいＡＬ型授業の開発とＡＬの地域普及について	北九州市立大学
福岡県立福岡高校	ＩＣＴを活用したバラエティーあふれる福岡高校オリジナルのアクティブ・ラーニングの開発	九州大学
福岡県立糸島高校	ＩＣＴを活用した 21 世紀型授業を取り入れた授業力向上の取組	九州大学
福岡県立朝倉光陽高校	生活指導と基礎学力の定着を一体とする授業改善の研究	福岡教育大学
福岡県立田川高校	主体的な学びの土台を作る田川アクティブ・ラーニング	九州工業大学
福岡県立光陵高校＊1	能動的学習による基礎的・基本的学力定着のための授業改善	福岡教育大学
福岡県立輝翔館中等教育学校＊1	ＩＣＴを利用して生徒の知識の活用力を高めるアクティブ・ラーニング	久留米大学

＊１　光陵高校と輝翔館中等教育学校は 2016 年度から研究開発校。
＊福岡県教育センター提供資料を基に編集部で作成

大学と連携した研究実践

専門の研究者からの価値づけが現場の自信につながる

研究開発校の研究実践は、各校が自校の教育目標や課題に応じて進め、状況に応じて特命プロジェクトチームが支援を行う。また、すべての研究開発校と連携先の大学、教育センター、県教育委員会が集まる研究推進協議会を年３回行い、各校の実践や教育動向などを共有した。

大学との連携は、取り組みを進める上で大きな力となった。研究開発校の１つである田川高校の教頭だった

高野朝幸主任指導主事は、こう語る。

「連携先の大学教員がALの素材として挙げた中に、小テストがありました。慣れ親しんだ素材も活用できると知り、ALへのハードルが一気に下がりました。また、授業で褒めていただくことも多く、専門家から自分たちの指導を価値づけられたことで、自信がつきました」

大学教員ならではと言える、大学入学後や就職後のキャリアを見据えたアドバイスも、授業改善の必要性を見いだすことにつながったという。

「大学では、ALの視点を取り入れた授業が増えており、円形テーブルやホワイトボードなどを備えた教室が整備されていると聞き、そうした環境に生徒が置かれることを考えると、高校でも授業の転換が必要だと感じました。また、学生の就職活動を支援する大学教員は、社会で必要とされる資質・能力を肌で感じています。そのような視点での助言は説得力がありました」（高野主任指導主事）

そうした大学と高校の連携が実現したのは、研究推進協議会などで繰り返し伝えてきたプロジェクトの目標が大学側にも浸透したからではないかと、瓜生主任指導主事は考えている。

実践内容の共有

参加者がすぐ授業に取り入れられるよう、発表会を体験型に

事業の目標の1つとして、18年度までに全県立学校にALの視点からの授業改善を広めることを掲げ、研究開発校の実践内容の普及にも力を入れた。各研究開発校が自校での公開授業を年2回、全研究開発校が集まる実践発表会を年1回開いている。

公開授業の案内は、全県立学校のほかに、近隣の中学校にも行う。

「大勢の先生に来ていただくことで、多様な視点から意見を聞くことができ、また、注目されることで、授業改善への意欲もさらに高まります。学校を外に開き、一緒に学ぶことで、学校が活性化するといった相乗効果がありました」（高野主任指導主事）

実践発表会には、全県立高校・中等教育学校から各2人が参加し、発表会を通じた自身の学び・気づきを自校の教師に共有する役割を担う。研究開発校の分科会は、参加者が模擬授業を受けるなどの体験型にしている。さらに、全体会では、分科会での学びや気づきなどを基に、自身の授業改善について発表し合うグループワークを行う（図2）。

そのような体験型の研修とすることで、参加者にとっては、その実践のよさを体感的に理解でき、自分の指導に置き換えやすくなる。参加者から、「今まで受けた研修の中で一番楽しく、身になった」という声もあったほどだ。一方、発表者にとっては、参加者の反応が直接伝わり、改善点をつかみやすいという利点があった。

「皆で実践を持ち寄ることで、多様な指導法を知り、その中から自分に合った方法を見つけられることが、よかったと思います」（鬼塚指導主事）

全県に広める工夫

体験中心の研修でALへのハードルを低くする

特命プロジェクトチームでは、学校全体が変わるためには、すべての教師が授業改善に向けた一歩を踏み出すことが大切だと考え、ALの視点からの授業改善を普及するための研修を開発・実施した。

最も大切にしたのは、授業にALの視点を取り入れる理由を理解してもらうことだ。メンバーが中央教育審議会の答申や関連の書籍を読み込

研究開発校の実践例

■福岡県立福岡高校［国語］

授業の流れの工夫　個人→協働→個人という順で活動し、個人の思考の深化・統合を促す。

【例】①前時の復習／教師の発問をペアで確認　②個人ワーク（5分程度）　③グループで読解（15分程度）　④個人ワーク（5分程度）／再度、個人で解答をまとめる。

ホワイトボードの活用　グループワークでは、小型のホワイトボードに言葉・図・絵をかきながら共有させる。思考の視覚化は考えの整理に有効で、手を動かすうちに、生徒自身が相手に伝わりやすい表現方法を考え出していく。また、生徒の理解が不十分な点が見える化されるので、教師も指導のポイントをつかみやすい。

書画カメラの活用　生徒の解答を書画カメラで映し、解答を確認し合ったり、足りない要素を指摘し合ったりする。拡大表示されるので見やすく、生徒は教師の話を集中して聞く。

■福岡県立朝倉光陽高校［日本史］

発問・活動の工夫　時代の異なる3つの歴史的事象を取り上げ、班ごとにその事象の具体的な内容を調べて発表し、ほかの班の発表も聞いた上で、3つの事象の共通点を探す。目標は、歴史的展開における歴史的事象の意味や意義を解釈できるようになること。単元の終わりや時代の区切りなどに、考えさせる場として行う。

【例】「大化の改新」「建武の新政」「明治維新」について、班内で分担して、教科書や資料集などから各事象の情報を収集し、1枚のシートにまとめる。知り得た内容を班で共有し、発表に向けて練習する。3時間目に班ごとに発表し、共通点を探して、個人でワークシートにまとめる。

学年集会の進め方の工夫　生徒指導が重要な場面で、教師が話すだけでなく、グループで「なぜ、そうするのか」「なぜ、よいのか、駄目なのか」を話し合わせ、生徒自身に考えさせ、気づきを促す。

み、これまでの指導が否定されているのではなく、急激に変化している社会に応じて、授業も改善していく必要があると説明した。

「授業改善を一方的に求めると、現場は否定的な思いを抱いてしまいますし、何のためのALなのか腑に落ちなければ、例示された授業の流れを単になぞるだけになるでしょう。教育目標や校訓に即した生徒を育てるためにはどのような授業をすればよいのかを、各校が考えられるよう問いかけています」（瓜生主任指導主事）

そして、学生時代にALの視点を取り入れた授業の経験が少ない教師でも、授業をイメージできるよう、説明とともにそれらを体験する場を設けた。例えば、3人1グループとなり、ALの3つの方法をジグソー法（＊2）で共有した後、各自、授業で取り入れたい方法や視点を発表し、最後に振り返りを行うといった内容だ。

「生徒が自分の言葉でアウトプットする場面をつくることから始めましょうと伝えました。授業の最後の5分間に振り返りのペアワークを行うのもALであり、学習のねらいによっては講義中心のALもありうると説明しました」（瓜生主任指導主事）

体験を重視した研修は授業改善の必要性やポイントに気づきやすいと好評で、どの学校でも参加者は熱心に取り組んでいた。

「担当教科が異なるようにグループを組むと、他教科の指導の様子が分かり、教科の枠を超えて授業改善を考えられるという効果もありました」（高野主任指導主事）

そうした評判が県内に広まり、任意の研修にもかかわらず申し込みが増え、3年間で80校もの学校が研修を実施した。さらに、初任者研修や教職5年研修などにも、同様の研修内容を盛り込み、ALの視点からの授業改善の裾野を広げていった。

図2 「新たな学びプロジェクト」実践発表会（2017年12月開催）

実践発表会には、県外の高校3校も含めた109校から170人あまりが参加。2015年度の1回目から活動的要素を取り入れ、参加者がただ話を聞くのではなく、研究開発校が実践した多様なALを体験的に学べるようにしている。

写真2　研究開発校以外の7校が、自校の実践をポスターで発表。自主的に発表した高校のほか、よい実践を行っている学校として高校教育課から依頼された高校が発表した。

写真3　研究開発校による分科会では、国語や英語、保健体育や家庭など、様々な教科の実践が発表された。模擬授業を行い、実際に授業で行った指導法を体験してもらう分科会も多かった。

写真4　全体会でも、席が近い者同士で4～5人のグループとなり、自分自身や学校全体での授業改善の実践内容を発表し、共有し合った。

成果と課題

県全体で学び合う文化を築き、授業改善をさらに推し進める

今後の課題は、実践の評価指標を作成して各校の成果を可視化し、さらなる授業改善の普及につなげることだ。実践発表会で研究開発校以外の高校がポスター発表をしたり、県外からの視察が増えたりするなど、手応えは得られている。また、17年度からは、研究開発校以外の実践を紹介する「ふくおかAL通信」を発信している。

「社会が大きく変わる中で、学習観や指導観も変えていくべき点があります。しかし、それは1人でできるものではありません。一部の教師だけでなく学校全体で、そして校内だけでなく学校を超えた形で授業改善に取り組むことで、大きな変化を起こせるのだと思います。学び合う文化を県全体で築き、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善がすべての学校・先生方に広まるよう、各校を支援していきたいと思います」（瓜生主任指導主事）

＊2　ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。